

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成26年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	実世界データ循環学リーダー人材養成プログラム	申請大学名	名古屋大学
申請大学長名	濱口 道成		
プログラム責任者	山本 一良		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体的に計画を着実に実施しており、体制整備が確実に行われている。 ・名古屋大学で実施されている全てのリーディングプログラム間での連絡をとるリーディング大学院推進機構本部を設置し、コーディネータ会議や統合カリキュラム会議を立ち上げ、プログラム間の連携活動を行っていることは好ましい。 ・大学院学生のセクション行程の1つとして、専門家グループに外部委託し、5日程度の時間をかけてワークショップ形式の面談も盛り込んで行っているのは、非常に興味深い。大学側だけでなく受験生にとっても、自己の将来像を自覚するなどの効果が見られ大変好ましい方向である。教員の負荷が重くならないように留意することは重要なことであり、外部業者に委託しているのは賢明な方法だと考えられる。一方において、学生の資質を見る良い機会でもあるので、完全な外部委託にするのではなく、カジュアルな立場で、教員が参加することについても検討の余地がある。 ・異なるバックグラウンドを持つ学生に対する配慮として、スキルを統一するための「Data Tools First」という実習を実施していることは、好ましい。どのツールを使うと何ができるかを知ることは重要である。プログラムの選抜後に全体として初めて学生同士が会う実習でもあり、学生同士の助け合い、コミュニケーションの場となることも評価できる。 ・ITスキルを一定レベルに引き上げるため、情報分野以外の学生が自習環境において指導を受けられるよう、特任教員を配していることもいわゆる落ちこぼれ対策の努力として評価できる。 ・博士の価値として、本プログラムが目指す「実世界データ循環」の能力は、重要であるとの印象を持った。 ・プログラム履修生専用スペース「リーダーズサローン」は、斬新な機材も導入されており、学生の滞在時間も長いようで、効果的に使用されている。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データ循環には、実世界での経験知も重要であるため、企業側からのより多くの参加を期待する。他のプログラムにおいては、企業メンターを特任教員として採用し常駐させているものもある。企業メンターは、産学連携の共同研究の芽になるだけでなく、学生が企業メンターと日々接することにより、企業側の雰囲気やキャリアパスについての示唆が得られるなど学生にとって効果があるとの意見もある。また、プログラムと企業の連携が強いため、博士取得後でも、企業への就職が期待できることが進学の動機になったとの学生からの意見もあり、この面でも企業メンター特任教員を通しての交流は、望ましいのではないか。 ・分野の異なる学生間のバランスをとる方策として、ツールのスキルを統一するための「Data Tools First」実習は、スキルの一定レベルまでの向上には有効である。他方、計算機科学の基本概念についての補助的な講義も必要ではないか。 ・英語教育は、全学的な取組があるということであるが、グローバル力の基本は英語力 			

であることから、プログラムとしても独自の取組が望まれる。特任教員として外国人を4名採用したとのことであるが、このメンバーの活用を検討することも一案である。

- 本プログラムは付加プログラムであるため、学生にとって、どの程度の負荷になるのか、検討が必要である。したがって、学生の声をよく聴き、学生と一緒にプログラムをつくるというスタンスでプログラムを推進することが望まれる。異分野が「データ」というキーワードで結びついていることを生かして、学生がリーダーとして分野融合のプロジェクトを実践することも検討してはどうか。